

シリーズ

発達に違いのある子どもたち

他者の気持ちを理解する機能

5月4日に放映されたNHKドキュメンタリー「赤ちゃんラボ」によるこそ！ヒトの始まりを科学する」という番組では、赤ちゃんがどうやって周りの人たちと関わりを深めていくのか、0～2歳までの赤ちゃん達へのさまざまな実験を通して、赤ちゃんが持つコミュニケーションの基盤となる能力を研究していました。実験結果が物語るのは、その時期の赤ちゃんの能力の高さと周囲の大人の関わり的重要性です。

人への興味の始まり

番組では生後1週間の赤ちゃんに、おもちゃの映像と人の顔の映像を見せた時、脳がどんな反応をするかを、脳の酸素量を測定して実験していました。おもちゃの映像を見せた時、脳の変化は全くありませんでしたが、人の顔の映像を見せると同時に脳が活動を始め、酸素量のグラフが一気に上がりました。しかし生後1週間ではまだ表情で示すことはできません。だから見た目にはわかりませんが、こんなに早

くから人を見分けていることがわかりました。赤ちゃんの脳は、早期から人と関わるように仕組まれているようです。

共同注意の重要性

赤ちゃんが養育者（一番心理的に近い存在）の顔を認識するのは3カ月頃と言われています。7カ月頃から徐々に養育者と他の人との区別し始め、より養育者への求心力が強まり、いわゆる「人見知り」につながっていきます。9カ月頃は「共同注意」ができるようになる時期で、養育者が見ている「物」に子どもも注意を向け、それを共有します。養育者は子どもと共有できる関係性がそこに存在すると、意図が通じている、わかっていると感じ、関わりも自然と増加していきます。「人見知り」の表れは、子どもが自分と他者の違いを理解できるようになった証であり、安心基地としての養育者の存在が重要になり、その後の社会性の広がりに影響していきます。

自分と他者の違いに気づく

「赤ちゃんラボ」に戻りますが、赤ちゃんが自分と他人との好みの違いが理解できるかの実験で、お菓子とブロックリーを用意して、研究者が赤ちゃんの前で、お菓子を食べた時はまずそうな演技、ブロックリーを食べた時は美味しそうな演技をします。その後研究者が赤ちゃんに「どちらがちょうだい」と言うのと、1歳3カ月の赤ちゃんはお菓子を、1歳6カ月の赤ちゃんはブロックリーを渡してくれました。これは自分と他者の感情の違いを理解する「自己意識」が発達している兆候だそうです。

この機能は後に、異なる互いの思いや考えを認めることができる「心の理論」の発達に影響していくと考えられます。「心の理論」^(注1)は生後18カ月頃から5歳頃にかけて発達していく、子どもが保育園や幼稚園の集団で、仲間との関係において、摩擦が少なく適応的に過ごすことができる鍵となる機能です。

発達の違いにより起る問題

発達障害、特に自閉スペクトラム症のお子さん、前述した「共同注意」

や「心の理論」の発達が、同じ年齢のお子さんと同じようには発達しにくいという特性があります。ゆえに他の人の興味関心に共感することや、相手の立場に立ち、気持ちを考えることなどが不得意なのですが、発達できないわけではなく、遅ればせながらも変化することがあります。できないことを否定したり非難したりするのではなく、状況を丁寧に具体的に伝えたり（多くは視覚的な手段が有効）、対処方法を一緒に考えたりして手伝ってくれる大人が周囲に増えることで、人との関わり大切さをはぐくむことができるのだと思います。



参考文献：子どもの感覚運動機能の発達と支援

大城昌平・儀間裕貴編集／メジカルビュー社

（注1）他者の心を推し量り、行動を予測したり解釈したりする能力である。